

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News



地球と戯れる(めるへの森幼稚園)

奇蹟

文学のある風景

わたしはスペース・シャトルから見た地球の景色を生涯、忘れることはないでしょう。地球はいまにも水がしたり落ちてきそうな、大きな青い水玉でした。そしてその青い水玉が、薄い薄い大気の層をいまにも破って、四方八方に散らばってしまいうる、漆黒の闇の中に浮いているのです。その可憐な地球に見入っているうちに脳裏に浮かんできたのは、いつか読んだ戯曲の、こんな台詞です。

「……この地球のやうに、ほどのよい気温と豊かな水に恵まれた惑星はいくつあるでせう。たぶんいくつもないでせう。だからこの宇宙に地球のやうな惑星があること自体が奇蹟なのです。惑星だからといってかならず生命が発生するとはかぎりません。ところが地球にあるとき小さな生命が誕生しました。これも奇蹟です。その小さな生命が数かぎりない試練を経て人間に至ったのも奇蹟の連続です。そしてその人間のなかにあなたがたがあるといふのも奇蹟です。かうして何億何兆もの奇蹟が積み重なった結果、あなたもわたしもいま、ここにかうしてあるのです。わたしたちがある、いま生きてあるといふだけで、もうそれは奇蹟の中の奇蹟なのです。かうして話をしたり、だれかと恋だの喧嘩だのをする、こと、それもそのひとつひとつが奇蹟なのです。……」

……地球が水惑星であることは奇蹟、その水が生命を生み出したのも奇蹟、その水惑星にわたしたちが生きていることも奇蹟、そんな奇蹟的な存在なのだから、わたしたちは生きなければならぬ、水とともに生きなければならぬ……。

井上ひさし「水の手紙―群読のために―」



『井上ひさし全文集その七』所収 (2010年 新潮社)

小池 光の 気になる日本語

10

「患者様」

近ごろ、病院に行くと「患者様」ということばとしばしば出会う。「患者様へのお願ひ」「患者様の権利」「エコー検査を受けられる患者様へ」と、こんな具合である。今日ちよつと病院へ行ったので、待合室に貼ってある掲示物から書き写してみた。

以前はこういう文書でも「患者さん」と言っていたと思う。いつのまにか「さん」から「様」へ格上げされたのである。

「さん」と「様」では、かもしだす雰囲気は大きく違う。日常会話ではわれわれはみな「さん」づけして呼び合っている。「様」とはまず言わない。呼ばれるとすれば相当に改まった関係の中である。「お客様、こちらでございます」みたいにホテルの係員が懇懇に案内してくれる。「さん」づけすると後の方の言葉遣いもおのずと変わり「お客様、こつちですよ」くらいになる。懇懇でなくなつた分、なれなれしすぎるかも知れないが、親しみはわく。言葉が変わるときは、言葉だけが変わるのでなく、態度、物腰が「様」「さん」でおのずと変わってしまうのである。

患者さんから患者様になったとき、なにが変わるのだろうか。「患者」がエラくなるわけである。そして、「お客

様」に近いものになる。医者と患者の間に、権利意識のようなものが芽生え、信頼と信頼で結ばれる医療行為がちよつと別のものへ変貌するやうな気がする。むかしは様は医者の方へつき「お医者様」というように用いた。患者様というとき、お医者様は消えてしまつて、対等関係というより患者の方がエラくなつてしまつた。これは妙なものである。お医者さんがイバるのは感心しないが、患者の方も病気になるたからといってイバることはないのである。

しかし、「患者さん」という言い方がくだけすぎているという感覚はわからないわけでもない。そういうときどういへばいいか。患者様でなく「患者のみなさま」と言へばよい。「患者のみなさまの権利」という日本語はへんなものではない。

またそんなに改まった場合でなく、普段着の場合なら、右の文例の中から言えば「患者さんへのお願ひ」「エコー検査を受けられる患者さんへ」で、ちつともかまわない。それで失礼と思う患者様あるいは患者さんは、いないだろう。

どんな場合でもひとつの言葉でやろうとするから硬直し、逆なことばだけの懇懇さを感じさせてしまう。言葉はこころである。

学芸室日記

○4月16日(土)、休館中の文学館で、扇畑忠雄歌碑の除幕式が行われました。扇畑氏は、『万葉集』研究の傍ら東北アララギ会を結成した東北を代表する歌人で、2005年に亡くなりました。生前は仙台文学館の設立にも深くかわり、運営協議会の初代会長も務めてくださいました。歌碑は氏が主宰した「群山」の同人が氏の生誕100年を記念して建立したものです。文学館から台原森林公園へ向かう道の



右側、石舞台のそばにたずんである歌碑には、この一首が刻まれています。

「雪の原青々と翳る時のありいづこともなき北のふるさと」

○6月26日(日)、再開後初のイベントとして「第14回 ことばの祭典」が開かれました。この、仙台文学館の開館前から続く短歌・俳句・川柳の吟行会も、一時は開催が危ぶまれていたものでした。今年のお題は「窓」「動く」。参加者は100名と例年より少なめでしたが、寄せられた作品の多くが震災を意識した力のこもったものでした。選者の方々は「いろいろな行事が中止になっている時期だからこそ開催する意味が

ある。この時期にしか書けない作品が集まったと思う」と講評していました。



○文学館の主な被害は、吹き抜けガラスのひび割れ、駐車場の擁壁の崩落・空調給水管の漏水、建物外部の軒天鉄板の落下などでした。書架も倒壊し書籍が散乱。常設展示室のハイケースは重み亀裂が生じたものの、自筆原稿等所蔵資料は無事でした。

た。工事業者の手配や資材調達には苦心しましたが、危険箇所の撤去と、展示室および書庫の復旧を最優先に取り組んで、6月24日に再開できました。

長い間休館して皆様には大変ご心配とご不便をおかけいたしました。「仙台文学館セミナー」は、夏以降に日程を変更して開催します。なお、開館後も復旧工事が続くため館内は若干の工事音の障害がございます。なにとぞご理解、ご協力をお願いいたします。



震災に寄せて

〜仙台文学館ゆかりの作家のメッセージ



倒壊した書庫

二〇一二年三月十一日(金)に発生した東日本大震災で被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。また、お亡くなりになった皆さまとご遺族の皆さまに心からお悔やみ申し上げます。

地震発生時、当館では、三階の展示室と二階の情報コーナー・交流コーナーに二十名ほどのお客様がおられました。皆様に無事に避難していただくことができました。職員につきましても、全員無事でした。

このたびの震災では、全国の方々からお手紙・お電話・メールで、お見舞いと励ましの言葉をいただきました。職員一同、心より御礼申し上げます。

仙台文学館ゆかりの作家の方々からもメッセージをお寄せいただきました。ここに紹介します。



漏水で木タイルが浮いた床

小池光 (歌人・仙台文学館館長)

このたびの大地震では宮城県がもつとも人的被害を受けた。こどものころ幾度も海水浴に行った荒浜や関上の海岸が、見る影もない状態を呈している映像に胸をつかれる。

戦後六十六年、このような自然災害はわが国になかった。その六十六年前の仙台大空襲は、あるいはこのようなものだったかも知れない。一面の焼け野原となった仙台にあって、わたしたちの父や母は獅子奮迅の働きをして、みごとに立ち直ってきた。今度の未曾有の災難から、わたしたちは必ず立ち直っていくと信ずる。

避難所のこと私たち、インタビュに答える中学生、高校生たち、若者たち。みなすばらしい。希望を失わず、謙虚に自己を抑制し、他を思い遣る。こういうこともたち、若者たちがいる限り、物理的になにか破壊されようと大丈夫と信ずる。信じようではないか。

伊坂幸太郎(作家)

震災後、こういった時にまったく役に立たない自分に落胆しつつ、ずっと途方に暮れていました。今も、途方に暮れてはいるのですが、いつまでもそうしているわけにはいきません。仙台の街はだんだん日常を取り戻そうとしています。余震の恐怖もある中、果敢な再起動と

恩田陸(作家)

言える部分もあるのかもしれないが、とても心強く感じられます。これから仙台が、東北が、社会がどうなっていくのかはまったく分かりません。が、どうせ分らないのであれば、明るい未来を想像したいな、と最近ようやく思うようになりまし。それはとても難しいですけど、想像するくらいであれば、そしてそれを少し信じていくことくらいであれば、やってやれないことはないような気持ちです。

の力はあらゆるものの回復に寄り添えると信じている。そんな言葉を生み出せるよう、微力ながら努力してゆきたい。

熊谷達也(作家)

「言葉の力」
一瞬で多くの人命と人の営みの場を奪った巨大地震と大津波の前に、私たちは言葉を失いました。自然の猛威を前にして、言葉はまったく無力でした。しかし、言葉は津波の引き波と共に地上から消えることはありませんでした。言葉は生き残りました。震災直後から、様々な言葉があらゆる媒体を通して飛び交っています。言葉は、今までもそうであったように、いつでも諸刃の剣です。震災を語る言葉には、考え尽くした果てに出てきた真摯な言葉もあれば、その場の思いにつきすぎない言葉もあります。本音を



落下した外側の鉄板

語っている言葉もあれば、建前だけの言葉もあります。飾り気はないけれど正しい言葉もあれば、虚飾によって誤魔化している言葉もあります。人の救いになる言葉もあれば、人を傷つける言葉もあります。そんな言葉の洪水の中から、これからの私たちがどんな言葉を選び取っていくか。それが、私たち自身の再生と復興の方向を決めていくのだと思います。

佐伯一妻(作家)

被災された皆様から心からお見舞い申し上げます。この厳しい現実の前に、言葉の無力さを痛感させられる日々です。特に津波の被害に遭った沿岸部の風景は、無そのもの、言葉を失って立ち竦むのみで、希望などという言葉は、まだ出て来ようもありません。

しかし、私たちは非日常の間にとどまっていることはできない。少しずつでも、震災のあとさきでも変わらないものを見つけて、日常を取り戻していくしかない。津波に襲われた夜、地上の惨禍をよそに空には満天の星が瞬いていました。避難所で月を友として仰ぎ見た人もあるでしょう。かくもか細く脆い足場の上に成り立っていたのか、と厭と厭というほど思い知らされること

なった日常のありがたみに、しばらくは心を添わせて生きようと思っています。

瀬名秀明(作家)

今回の震災で私はライフラインの復旧を待ちながら、自宅の窓明かりで科学書や吉田健一の随筆を読む日々を過ごしました。情報源はラジオでした。その数日間、私は本当の時間と共に生きていこうと思います。

震災は私たちから通信と交通手段を剥ぎ取ってゆきます。しかしあえていえば、それは私たち人間の心と身体のパラメータに合ったものだったかもしれない。直接の被災地でない地域の人は、最初から情報インフラを確保できたがために、大量のニュース映像に晒され、ネットを検索し「Twitter」に書き込まずにはいられなかったでしょう。行動できるがゆえに精神で考えなければならぬものだったはず。そうした「情報災害」が全国へ広まってしまったことは、今回の震災の大きな特徴です。

すべての人が被災者なのです。物理的被災地に住む私たちは多くの方から義捐金を、共になんばろうというメッセージをいただきました。ならばいま私たちが、情報災害の被災

者である全国の人々へ向けて、たんなる「被災地文学」ではない本場の言葉を発信してゆくことも大切なのだと感じています。良質のコンテンツを、笑顔や希望の糧となる物語を。この仙台から日本へ向けての思いやりの心が、いま本当に大切なのだと思っています。

三浦明博(作家)

「微動」
あの日以来、身体の奥の方ですっと微動が続いている感覚があります。何か本質的に、決定的に変わってしまったのかもしれないという思いとともに。気分が落ち着かず、じつくり物事に取り組むことが難しい精神状態で、しばらくの間は本を読むむ気になれませんでした。新聞は読んでいましたが、刻々と変わる情報を知りたくて目を通していただけません。

実家の片付けを手伝いにいった時、ふと学生時代に読んだ、山口瞳著「酒呑みの自己弁護」を手にとりました。現実逃避するように毎夜酒を飲んでいたので、たかからかもしれませんが、かくそれがきっかけで少しずつ本が読めるようになりました。読書の愉しみは日常と深く関わっている。代わり映えのしない平凡な日々の中でこそ、本には意味があるのかもしれない。

そんなことを感じました。疲れた誰かが手を伸ばしたとき、そこに本がある。心の震えと寄り添うような本が、その人のそばに存在してほしいと願っています。

森まゆみ(作家)

「東日本大震災に際して」
阪神淡路大震災のとき、私は三人の学童を抱えた母子家庭の母で、何もできませんでした。こんどは違う。彼らは自立した社会人です。三月十一日から東京で支援助物資、情報を届けるためにしごとを減らして活動しています。

私の祖母は丸森育ち、私には宮城の遺伝子があります。加えて足掛け五年丸森で畑を耕し、農業や漁業の大変さ、今置かれている困難を知りました。食べるものがなければ文学もありません。いまは避難所に本やマンガを届けたり、赤レンガの東京駅の屋根に被災した登米・雄勝のスレートを乗せるために働いています。東京駅が東北と東京をつなぐ復興のモニュメントとなりますように。

「伊達藩南境のコサック兵」であつた先祖が私の肩に乗ってはげましてくれています。ともにふんばりましょう。

天災の多い日本では、『方丈記』や『平家物語』といった古典文学に災害の記述が残されています。関東大震災の時には、芥川龍之介・志賀直哉などの作家たちも体験を文章に残しています。今回の震災でも、被災した多くの作家や詩人たちがすでに新聞や雑誌などでその体験を言葉に表しています。この現実を受けとめ、人間の命に向き合い、少しずつでも歩みを進めるための力となる言葉。こうした言葉が、今を生きる多くの人々に力を届けてくれることを願わずにはいられません。

つなぐことば

受け止め、伝え、歩む

佐伯一麦 ↓ 古井由吉
往復書簡(『朝日新聞』)

震災から一月を経た四月中旬、仙台在住の作家・佐伯一麦さんと佐伯さんが敬愛する古井由吉さんが、『朝日新聞』紙上で書簡の交換を始めました。戦災を経験している古井さんと、日常に心を添わせる佐伯さんが、震災と死者をめぐ



2011年4月18日(右)と同年5月2日(左)の往復書簡の掲載面。4月18日から始まった往復書簡は、今も続いています。

ぐる言葉を深く鋭く洞察しています。その一部をご紹介します。

古井由吉 ↓ 佐伯一麦
二〇一二年六月二十日

「佐伯一麦様
戦乱の凄惨な境から帰還した人たちはおしなべて、その後三十年ほど、その体験について口が重かった、ということがあります。現に暮らしている日常の中の言葉ではとうてい伝えられない。口にしたところから徒勞に感じられる、ということだったのでしよう。話さずに亡くなった人も多かったです。戦後の六十六年には言葉の、大きな空白が開いていのように思われます。後世におくるには、いっそ碑文のようなもののほうが強いのではないかと、考えることもあります。いかめしく黙りこんでいるような碑文こそ、後世の人の心に、物を言うのではないかと。言葉の空白に耐えた生存者たちの心が寄り集まって、死者たちの沈黙も加わって、目には見えぬ碑文が立ちあがることも、あるのかもしれない。」

佐伯一麦 ↓ 古井由吉
二〇一二年六月二十七日

「古井由吉様
大きな喪失感を生涯、ある

いは何代にもわたって抱え込むしかない。当たり前のことを当たり前としてはっきりと認識させてくれる言葉が、いつからか世間からめっきりなくなっていたように思えます。目には見えぬ碑文、とあるのを読んで、この震災で身内を亡くされた翌年の知人に以前教わった、空に指で文字を記して会話をする空文字のことを思い出しました。いま空文字を一文刻むとしたら、「悲」でしようか、「無」でしようか。「恨」「歎」「虚」。私は「畏」と刻みたい。
あまりにも悲観的すぎることは口にするべきではない、という自製の心も働くのでしようが、震災をめぐっても、言葉は言語欺瞞、言語不全に陥っているように思われます」

和合亮一・詩の磔

福島市在住の詩人・和合亮一さんは、福島第一原子力発電所が爆発した後の三月十六日から、ツイッターでことばを発信。「詩の磔」と名付けられたこの試みは、五月二十五日まで続き、一万三千人が読み続けました。和合さんは四月に日本近代

岩出山高等学校
生徒による
震災の短歌

文学館で開かれた詩人たちによる朗読会でも「詩の磔」を披露したほか、オランダで開かれた東日本大震災の犠牲者を追悼するコンサートにも招かれ、「詩の磔」から生まれた震災の詩を朗読しました。今後、朗読会やコンサートが予定されています。

「静かな夜です。
とても静かな夜。放射能の吐息」

「私は震災の福島を、
言葉で埋め尽くしてやる。
コンドハ負ケネエゾ」

歌人の梶原さい子さんが勤務する岩出山高等学校では、二〇〇七年から全校生徒を対象に、短歌創作を学習に取り入れています。四月の題は「春」と「東日本大震災」。「ニュースや報道で見る被害ではなく、停電あるいは買い物の列に並ぶといった、自分自身の身近な震災体験を読みこんだものが多くありました。「春」を詠んだ作品にも、それぞれ震災体験が反映されています(梶原さん)。

「石高短歌
くワタシタチノウタ
月間優秀作品」より
あの時は予測もできぬ暗やみで
いつもは見えない星を見上げる
一年 秋生美幸
町歩き咲いて散っていく桜見て
ふと考えた命の時間
一年 千葉岬



『詩の磔』はその後徳間書店から単行本として刊行されました。そのほか、震災をうけての詩集『詩の黙礼』(新潮社)『詩の邂逅』(朝日新聞出版)を出版。

梶原さん自身も気仙沼の実家が被災。震災の時は所属する結社に出す作品の締切時で、自らの被災体験を十首詩だとのこと。「自分の中にたまった震災の体験を言葉に出したいという気持ちになりました。歌があつて良かった、と思いました」

「被災の現場に足を運んで話すことを大切にしたい」と語ったとよたさん。当日は、子ども連れの来場者も多く見られました。(撮影:越後谷出)

子どもとあゆむ
ネットワーク

仙台で子どもに関わる様々なジャンルの活動をしてきた人や、その活動を支援してきた人が震災後に集まって立ち上げたプロジェクト「子どもとあゆむネットワーク」。被災した子どもたちが早く日常に戻れるように支援することを目的とし、「絵本」「おもちゃ」「文具」などを避難所や被災地の保育園や幼稚園などに届ける活動をしています。プロジェクトメンバーのネットワークで、全国の作家や出版社、文庫の会のメンバーから絵本や児童書が届いたそうです。



仕分けられた絵本が入っている段ボールは、宝物がぎっしりつまった箱。



被災地の学校や保育園には本の置き場がないということから、オリジナル本棚を寄贈する「本棚プロジェクト」も立ち上げました。素材は、最終的に資源リサイクルが可能な強化ダンボール製にこだわったとのこと。



届いた絵本を仕分けしている谷津智里さんは、6歳と1歳の子供のお母さん。絵本は今も途切れなく届くそうですが、避難所が閉鎖され仮設住宅に入居する人が増えていく中で、絵本を求める個人の方がこれからの課題だそうです。「震災で絵本がなくなってしまう方、ご連絡ください」



井上ひさし (撮影:佐々木隆二)

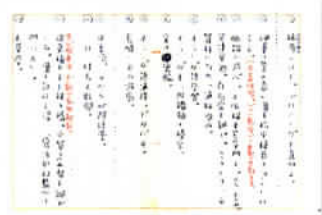
7月8日には、奥山仙台市長から井上ユリ夫人に感謝状が贈呈されました。



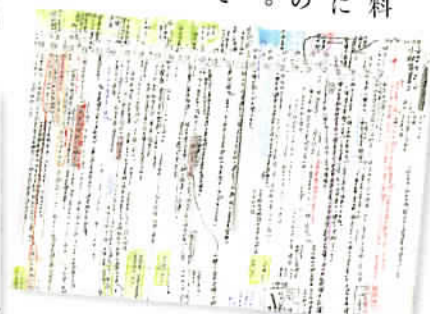
仙台文学館の初代館長・井上ひさしの原稿など自筆資料約二百二十五点(約三万二千枚)が、このたび仙台文学館に寄贈されました。寄贈されたのは、一九七〇年に発表された初期の代表作「表裏源内蛙合戦」の創作メモ・プロットをはじめ、仙台ゆかりの自伝的作品「青葉繁れる」や東北を舞台にした代表作「吉里吉里人」など小説の原稿やプロット、また、「頭痛肩こり樋口二葉」(こまつ座旗揚げ公演)や「イーハトーボの劇列車」など戯曲作品の原稿や創作メモなど。なかには遺作となった「組曲虐殺」の年表なども

井上ひさし 初代館長の自筆資料が仙台文学館に寄贈

含まれており、念入りな資料調査と緻密な構成のもとに描かれる井上作品の創作の過程を示す貴重な資料です。寄贈された資料については、整理・調査を進めながら、常設展示室の「一本の巨樹」井上ひさしのコーナーでの特集展示などで紹介していきます。また、井上ひさし生前からその蔵書が寄贈されていた山形県川西町の「遅筆堂文庫」や、二〇一二年三月に山形市蔵王の「シベールアリーナ&遅筆堂文庫山形館」に新たに開館する「井上ひさし未来館」などのゆかりの施設とも、資料を生かした連携事業をしていきたいと考えています。



「表裏源内蛙合戦」創作メモ。昭和45年に発表された作品の創作資料。今回の寄贈資料の中でもごく初期のもの。



「組曲虐殺」創作のためにつくられた小林多喜二の年表。戯曲制作のために詳細な年表を作り上げました。



「国語元年」地図。井上ひさしの創作メモには、イラストや地図がよく書き込まれています。これは地域による表現の違いを地図にした言わば方言地図。



こまつ座旗揚げ公演「頭痛肩こり樋口二葉」場割。



戯曲執筆に入ると、愛飲していたコンケルの空箱で俳優の紙人形を作ってそれを見ながら執筆したという逸話はつとに知られています。これは「太鼓たたいて笛ふいて」の紙人形。

こまつ座第94回公演 「父と暮せば」

2011年8月26日(金) 開演19時(開場:18時30分) 会場:電力ホール 入場料(全席自由)前売:3,000円(友の会会員:2,700円)当日:3,500円 プレイガイド:仙台文学館 仙台市青年文化センター せんだい演劇工房 10-BOX 藤崎 仙台三越



※仙台文学館・仙台市青年文化センター・せんだい演劇工房 10-BOX では友の会割引が可能です。 主催:財団法人仙台市民文化事業団(企画制作:仙台文学館)

広島で被爆し、ただ一人生き残った自分を責めながら生きる美津江と、その前に現れた父・竹造との対話劇。1994年の初演で大きな反響を呼び、国内のみならず、フランスやロシアなど各国で上演・リーディング・翻訳されている、数ある井上戯曲のなかでも代表作の一つです。東日本大震災により、改めて「命」の持つ意味を考えさせられる昨今、「死者と生者の対話」という、作品の根幹に据えられたテーマと、この戯曲にこめられた井上ひさしのメッセージを一人でも多くの方々に受け取っていただきたく思います。仙台では11年ぶりとなる「父と暮せば」の舞台にぜひ足をお運びください。



辻萬長 栗田桃子

企画展 「林静一の世界展 ~赤色エレジーから小梅ちゃんまで」

会期:二〇一一年 七月十六日(土) ~ 九月四日(日)

夏休みの企画展として、画家・イラストレーターの林静一



日本画「おてだま」1995年



画ニメ「赤色エレジー」2007年



「萩の夢」1980年



「小梅の初恋絵草子」2006年

の原画展を開催します。漫画雑誌「ガロ」に作品を発表し、昭和の青春マンガ「赤色エレジー」の作者である林静一は、児童文学書の挿絵や、絵本作家、さらには雑誌の表紙や舞台劇ポスター、イメージキャラクターのイラストなど、実に多彩な活動を展開しています。 今回の展示では、四十年にわたる林静一の画業を、日本画・木版画・原画を中心に、セル画・DVD用カラー漫画などデジタル作品を加えた代表作約百七十点の展示で紹介

します。特に、長年にわたりイメージキャラクターのイラストを手がけている「葉匠三全」の広報に使われた原画やパッケージ紹介のコーナーも設け、市民が親しめる、仙台文学館ならではの展示になっています。

同時開催 「こども文学館 えほんのひろば」

会期:二〇一一年 七月十六日(土) ~ 八月二十三日(日)

例年のように期間中は二千冊の絵本を自由に読み味わう「絵本の部屋」や折り紙・しおりを作る「手作りコーナー」も設けます。紙芝居・読み聞かせなどのお話会なども連日開催。

○お話し会 *申込み不要、直接会場へ

	午前(11時~)	午後(1時30分~)
7月17日(日)	てんたん人形劇場	
20日(水)		絵本と木のおもちゃ 横田や
21日(木)	おはなしてんとうむし	おはなし泉の森
22日(金)	心布の里 民話の会	おはなしの森~やさしい風
23日(土)	おはなしやま	
24日(日)		人形劇のひなたぼっこ
26日(火)	めるへの森幼稚園絵本サークル	おはなしおひさま
27日(水)	影絵サークル・にじのぼけっと	
29日(金)	おはなしぶーさん	おはなしの森~やさしい風
30日(土)	おはなしクローバー	
31日(日)	おてんとさんの会	
8月 2日(火)	語り手たちの会・みやぎ	紙芝居文化の会 みやぎ
3日(水)	ロゴス腹話術研究会	
4日(木)	ロゴス腹話術研究会	泉おはなしの会
5日(金)	心布の里 民話の会	
6日(土)	仙台手をつなぐ文庫の会	おはなしポケット
9日(火)	みやぎ親子読書をすすめる会	紙芝居文化の会 みやぎ
10日(水)	読み聞かせボランティア ぐりの会	みやぎ親子読書をすすめる会 わらべうた
11日(木)	おはなしの森	ロゴス腹話術研究会
18日(木)	泉おはなしの会	
19日(金)	絵本お話し会「ぼすてる」	絵本お話し会「ぼすてる」
20日(土)	若林演劇研究会	とびだす絵本「リラの会」
21日(日)	IMS「やまねこ屋」	IMS「やまねこ屋」